

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.9

『風と雲の便り』を発行して3年目。
おかげさまで、本号で第9号を迎えます。
今回は、これまでの表紙を並べてみました。
こうしてみると、
四季折々の自然の移ろいを感じます。
これからも、野殿・童仙房の魅力をもっともっと引き出せるような、
装いをこらした表紙を
お届けしてゆきたいと思っています。

風の便り

調査研究にも着手

京都大学大学院教育学研究科が野殿・童仙房の地域にお邪魔するようになってから、3年目を迎えます。3月8日の「寄り合い」の機会を利用して、2008年度の活動計画を説明させていただきました。その際にさまざまご意見やご感想、ご助言をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

本年度は、昨年度に引き続いて、「エクステンション講座」（星の観察や料理の実習等）、「風と雲の広場」、「昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どもの農業体験」などの活動を行う予定です。それらの活動をさらに充実させ、昨年以上のたくさんの人々が参加して喜んでもらえるような企画を行いたいものです。7月には、ここ野殿・童仙房の地に、電気自動車や電気自転車を試験的に運転してもらう企画も考えています。また、京都大学の学生サークル「紙芝居研」の協力で、子どもからおとなまで楽しめる「紙芝居」の実演を行う予定です。

ところで、これまで紹介してきましたように、さまざまな研究調査活動を少しずつ始めています。調査研究活動は、野殿・童仙房の歴史や伝統文化、生活全般にわたるものを考えていますが、お互いに地域をもっとよく知るために不可欠なものと思われます。

本号の2・3面に掲載されている生駒報告「童仙房地区の歴史的形成と教育の関わり」は、数ヶ月間の資料の読解と住民の皆さんへの聞き取り調査の成果の報告ですが、それは同時に本格的な調査活動のプレリユード（「序曲」）にもなっています。音と言えバ、今年度は、ABC 朝日放送ラジオが長期間の取材に訪れる予定もあります。地域の皆様にはお世話をおかけするかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

シンポジウム「なぜ心理学者が地域に足を運ぶか」

フィールドに関心のある京都大学の心理学者が集まってこれまで研究してきた成果の報告と今後の研究の抱負を自由に語っていただくシンポジウムを開催しました。フィールド心理学は地域のさまざまな課題を前にして何が可能か、地域の人たちと共に考えました。

日時：4月18日（金）19:40より21:00まで

場所：旧野殿童仙房小学校（京都府相楽郡南山城村）

報告者：やまだ ようこ（教育学研究科教授：生涯発達心理学）
杉万 俊夫（人間・環境学研究科教授：社会心理学）
永田 素彦（人間・環境学研究科准教授：社会心理学）
コーディネーター：
前平 泰志（教育学研究科教授：生涯教育学）

主催：野殿童仙房生涯学習推進委員会

共催：京都大学 GCOE プロジェクト「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」
教育実践コラボレーション・センター「教育空間創造ユニット」

2008 年度活動予定表

月	内容
4	シンポジウム「なぜ心理学者が地域に足を運ぶか」
5	『風と雲の便り』第9号 調査研究（研究デザイン策定） 講義と実習「耳を澄ます料理を味わう」
7	「風と雲の広場」（催し） エクステンション講座：「電気自動車を使う」 実演：「紙芝居を見よう」京大紙芝居サークル 市：「チャオ！の広場」 「いつでもだれでもなんでもマーケット」 『風と雲の便り』第10号
8	「昔子どもだったおとなと今の子どもと 未来の子どものための農業体験」～11月 調査研究（予備調査）
9	エクステンション講座：「星を観測しよう」
10	「風と雲の広場」（催し） エクステンション講座 市：「チャオ！の広場」 「いつでもだれでもなんでもマーケット」 調査研究（集計）
11	農業体験：収穫祭・南山城村「活き生きまつり」への出店 調査研究（分析） 『風と雲の便り』第11号
2	『風と雲の便り』第12号
3	今年度の振り返りと次年度の予定についての話し合い

（詳細は今後チラシなどでお知らせします）

風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.1



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.2



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.3



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.4



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.5



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.6



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.7



風と雲の便り

野殿・童仙房から――
野殿・童仙房へ

vol.8



2008年5月16日発行

発行：京都大学大学院教育学研究科

教育実践コラボレーション・センター

「教育空間創造ユニット」

編集：前平泰志

編集協力：岡田新子

制作：（株）松籟社

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/>

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科

TEL:075-753-3075

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会

〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2

会長 中村富士雄／副会長 西村秀俊

童仙房地区の歴史的形成と教育の関わり

童仙房が大変興味深い歴史をもっていることは、住民の皆さんの話や図書館、村史編纂室にある資史料、また『童仙房開拓百年の歩み』、『南山城村史』で知ることができました。昨年度、野殿・童仙房をめぐる研究を始めるにあたり、私は、童仙房の歴史を、2006 年 6 月に京都大学大学院教育学研究科と野殿・童仙房の皆さんが「野殿童仙房生涯学習推進委員会」を設立するに至るまでの経緯を中心に調べようと思いました。研究に際しては、地域の皆さんにインタビュー、資料調査、また現地案内など多大な協力をいただきました。ここでは調べた歴史の概略を報告いたします。

開拓と産業の変遷

江戸時代後半に藤堂藩、柳生藩、禁裏御料の境界地として「無住の地」であった童仙房域は、成立したばかりの京都府（現在とは異なり、京都市中と北山城を中心とした狭い領域でした）によって直営の開拓計画が推進されました。全国でも最も早期に計画された童仙房の開拓は、幕臣が多かった京都の事情（同様に江戸は、現千葉県松戸市の小金原が開拓されました）によりますが、当初想定していた士族卒族に禄制が通達されたため、庶民中心の応募となりました。府が開墾を主導し、1869～70（明治2～3）年にかけて141戸にそれぞれ田四反、畑八反、山林二町が分配され、1872（明治5）年には綴喜、相楽二郡の支庁が設置、府南部の中心地として村づくりが推進されました。しかし、通行の便などから早くも1879（明治12）年に支庁は木津に戻され、同時に警察や郵便局も移転し、当初の入植者の7割近い人々が離村することになりました。

開拓当初から府は、開港の影響もあり茶園を中心とした開墾計画を持っていました（当時、お茶は生糸に次ぐ重要な輸出品でした）。南山城地域に近世から発達していた棉作と茶業は、やがて貿易圧力からも茶業への転換が進みましたが、1911（明治44）年時点では、童仙房に残った農家47戸のうち、自作17戸・自小作10戸・小作20戸と短期間のうちに激しい階層分化を生じていました。大規模に土地を集積したのは奈良県を含め村外の地主でした。

茶業を補完し、昭和に入るとやがてこれをも凌駕していったのが木炭でした。大河原炭は京都市内でも良炭として高値で取引され、その多くが童仙房から搬出されました。また1943（昭和18）年には隣接する高山村で亜炭層が発見され、大河原駅が拡張、道路が整備される中、人口は急増し、戦争末期には疎開人口も加わりました。

敗戦直後の木炭景気によって、1947（昭和22）年、電灯が引かれ、また食料増産のため政府が制定した「緊急開拓事業実施要領」に基づき、「第二次入植」が行われましたが、1953（昭和28）年、二度にわたる南山城大水害によって、相楽郡は大きな被害を受けました。その対策からダムや道路建設が進む中、1955（昭和30）年には「新農山漁村建設選定村指定」により童仙房に「第三次入植」が行われ、1969（昭和44）年、開拓百年を69戸337人（第一次入植者の子孫は分家も含めて42戸）で迎えることになりました。経済成長は村の生活を向上させましたが、エネルギー転換により木炭需要を低下させ、茶業への回帰と兼業化、さらには離村も促進しました。

童仙房をめぐる歴史研究

童仙房の歴史は、戦前から注目されてきました。1929（昭和4）年から相次いで発表された論考は、1935（昭和10）年に出された吉川秀蔵の『士族授産の研究』に集約されますが、この間の分析がすべて開拓事業としての成否を問う経済史的観点が中心となったことは大きな特徴です。戦後に出された論文もこの延長にあり、開拓帰農を敗戦後の日本に投影しようとしています。

これらに対し、1970年代に行われた研究は「過疎」を視点として設定し、その代表として童仙房をみようとしていました。京都府立大学が中心となったこれらの研究では、過疎を「社会病理」としてとらえ、その処方箋を導き出そうとする極めて現実的なものでした。しかし、その社会学的視点から悉皆調査を行っており、今では貴重なデータとしての意味をもっています。

1995年からは南山城村史の編纂事業が開始されます。10年にも及ぶこの事業は、村の生活全般を歴史的に捉えようとしており、童仙房を始め村民の皆さんから貴重な資料提供を受け、また広範な聞き取り調査も行ってきました。ここでの成果は『南山城村史』として結実しますが、この作業に加わった研究者が、民俗学的視点や歴史的視点から論考を発表しています。市町村史は合併や統合により新たな自治体が誕生するという歴史的変遷に伴い、町や村の「自意識」を編み直す役割を背負っていますが、そこに残された記録は、個々の共同体の成り立ちを行政区を越えた姿として提供してくれます。図書館に隣接する村史編纂室にある貴重な資料は、今後とも南山城村の姿を伝えていってくれるものだと思います。

学校をめぐる攻防

開拓されたばかりの童仙房では、1875（明治8）年に府が道宣小学校を設置し、吏員や泥洹寺住職などが教員として村の子どもたちを教えていました。同小学校は1879（明治12）年支庁が移されたことを契機に一旦、廃校となり、開拓村であることからか1897（明治30）年には義務教育免除となりますが、やがて1902（明治35）年には大河原尋常小学校童仙房分教場が設置されました。府がいち早く神社と学校を設置し、また義務教育免除を布達していたことは、教育作用以上に学校に村の紐帯としての機能を期待していたと考えられます。一方、住民は、1887（明治20）年、湯船村との村界確定に際し（湯船村に有利な合意に至ったためか）、湯船村より童仙房村小学校教育補助金として500円の寄付を受ける契約を結んでおり、早くも小学校教育が村の担保機能を有していることを示しています。実際、童仙房住民による京都府への嘆願書は、「無筆」「無学」なるが故に童仙房住民が兵役や嫁入りで「童仙房生レナリト卑」しめられるため、学事奨励とそのための共有財産の設置を訴えています。童仙房は移住者の多大な労苦によって村落を維持してきましたが、決して裕福な村とはいえませんでした。明治から続く村の教育にかける熱意は、この歴史からくるのかもしれません。戦後において再三に渡り、京都府は小学校の統合を勧告しています。しかし、それを跳ね返すかのように、1982（昭和57）年には野殿童仙房小学校が独立しています。村史編纂に関わった前野雅彦氏は、童仙房の特徴として、「徳川の平和」とよばれる、他村が経験してきたような「村落を文化的制度的に結束させる「平和だが停滞した時代」がなかった」ことをあげています。この過去の蓄積分を、教育を媒介とした未来への投資に向かわせたのが、小学校の独立や、また京都大学との連携であったのかもしれない。

ただ、この地区は「官」の恣意に翻弄されてきた歴史を持っています。京都大学も考えようによっては「官」に相違ありません。地域の皆さんと京都大学の関係者が、その立場を越えて、現在の日本が抱える多くの課題や可能性をこの地域に見い出し、それこそ「協同」する中で、新たな展開が見えてくるのではないのかと、歴史を振り返りながら感じています。

教育の新たな試み

「開拓」「フロンティア」は未来に立ち向かう勇壮な響きを持っています。しかし、近代国家がこの「開拓」を必要としたのは、これによって「発見」される「他者」を通じて新たな「国民」を形成するという目的もありました。この意味で童仙房は「内なるフロンティア」としての意味を持っていたのかもしれません。童仙房と隣接する対照的に歴史的蓄積の深い野殿地区は、童仙房を「他者」として見てきた隣人にあたります。しかし、その野殿地区が「協同」して「野殿童仙房小学校」という独立校を成立させ、また、今回新たに「野殿童仙房生涯学習推進委員会」を設けていることは、教育を紐帯にした新たな試みの始まっていることを教えてください。ここに京都大学が加わることは、近代教育の持ってきた意味を根本から問い直す可能性も示してくれているようにも感じます。

童仙房略史

1869（明2）	入植開始（当初は窮民開拓→士族卒族耕作予定）、製茶目的（兵庫開港） 一戸に付き…田四反・畑八反・山林二町
1870（明3）	141戸
1871（明4）	136戸 田畑137町 童仙房村成立 146戸（当初は開拓官員が村を運営）
1872（明5）	童仙房支庁設置（綴喜・相楽二郡）
1875（明8）	道宣小学校設置（野殿・童仙房両村立）
1876（明9）	泥洹寺（浄土真宗 住職が小学校の教員の役割）
1879（明12）	支庁を童仙房→木津へ移す。警察、郵便局も移動
1888（明21）	89戸
1892（明25）	道宣小学校→童仙房分校へ（あるいは1902年か…校舎が新築に）
1897（明30）	58戸 333人 田畑82町 関西鉄道大河原駅設置
1902（明35）	大河原尋常小学校童仙房分教場
1911（明44）	農家47戸中 自作17戸・自小作10戸・小作20戸
1917（大6）	消防隊結成
1919（大8）	大河原発電所完成（大正期に童仙房以外に電灯、童仙房は1948）
1929（昭4）	童仙房倶楽部（自治会議所）
1933（昭8）	童仙房まで林道開設
1942（昭17）	童仙房分教場 訓導二人・四～六人の生徒、三人の朝鮮人生徒
1943（昭18）	亜炭層発見（高山村）…大河原駅拡張 人口急増・道路整備 木炭景気
1945（昭20）	51世帯+疎開家族25世帯+敗戦後27戸入植
1947（昭22）	大河原中学校開校
1948（昭23）	電灯全地区に（野殿は1923年に、近い9番には35年に）…木炭景気 木津高校大河原分校設置（昼間定時制4年、1956年募集停止59年廃校）
1949（昭24）	組合立笠置中学校（大河原中学校廃校）野殿童仙房分教場（童仙房公民館内）
1952（昭27）	童仙房分教場校舎竣工
1953（昭28）	南山城大水害（道路壊滅…孤立化）
1955（昭30）	南山城村（大河原村+高山村） 新農山漁村建設選定村指定 112ha 開墾計画、9戸入植
1959（昭34）	有線電話加入
1966（昭41）	電電公社電話架設
1969（昭44）	開拓百年（69戸 337人）
1975（昭50）	笠置中学校移転、童仙房分教場廃校
1982（昭57）	野殿童仙房小学校開校
1996（平8）	77世帯 272人（開村当初からは23戸）
2006（平18）	野殿童仙房小学校閉校 京大と連携 野殿童仙房生涯学習推進委員会発足